

2017年度 自己点検・評価【経済学部】

C票

<目標、行動計画>進捗確認シート

提出日：2018年2月22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	経済学部長	作成部局	経済学部
-----	-------	------	------

【A票：教育研究目標1】

(タイトル)

学部での専門的な学びを実践し、卒業後に社会で活躍していくために必要な基礎学力を修得できる教育を提供する。

(狙い内容)

多くの学生は本学部卒業後は社会へと出て行くので、社会、とくにグローバル化が進む社会で役立つような学びを本学部で提供する。そこで、教務上の1つめの目標として、基礎学力を修得する教育に力を入れる。ここでの基礎学力とは、経済学・数学・統計学などの分析ツールを利用して現実の経済を分析する能力と、英語などの外国語を使って経済やビジネスについて議論できる能力である。これらの能力のうち、今回は外国語に関する教育の充実を目標として掲げる。すなわち、外国語資格・検定試験の成績向上を目指し、また留学生とともに英語を使って経済と経済学を学ぶ科目の提供を増やす。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

外国からの受け入れ留学生も増加する中、経済学部においても英語で提供する講義科目の割合が高まる。こうした中で、留学生の講義への質的なニーズにも十分こたえ得る内容を提供するとともに、日本人の受講生も内容を十分に理解し、満足のいく成果を得られるような状況を達成する。

2. 達成度評価

評価指標	TOEIC (TOEIC-IPを含む)で600点以上のスコアを記録する学生の割合	評価尺度	A : 約20% B : 約16% C : 約12% D : 12%未満
------	--	------	---

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D 600点以上のスコア取得者の割合が9.6%(2年生)	D 11月実施のTOEIC(2年生)の600点以上のスコア取得割合が10%台(目標)	C	C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	D	実績 D				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	600点以上のスコア取得者の割合が9.6%(2年生)	11月実施のTOEIC(2年生)の600点以上のスコア取得割合が8.1%		11月実施のTOEIC(2年生)の600点以上のスコア取得割合が10.8%			

【2017年度の進捗状況について】

2017年度の経済学部一斉TOEICテスト(2年生)は10.8%であった。(12月に結果判明)

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい・いいえ

<上記で「いいえ」を選んだ場合>

①理由： 昨年度の実績が8.1%と低く、大幅な上昇が見込めないため進捗状況を「D」とした。

②今後必要な取組み： 行動計画①が今年度で終了する見込みであることを踏まえて、新たな「今後の取組」の作成を検討する必要がある。

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・評価指標は、学習成果の観点から定められており適切です。また、現在、習熟度別クラスを設置するなど達成に向けた具体的な行動をとられていることは評価されます。(A)
- ・行動計画1は既に達成できており、行動計画3についても達成が見込まれます。今後は本教育研究目標の着実な推進に向けて新たな行動計画の策定が期待されます。(B)
- ・行動計画①～③の取り組みは進展していますので、教育研究目標の評価指標の進展が期待されます。(C)
- ・次年度以降の新たな行動計画の策定が期待されます。
- ・達成度評価の評価尺度を下方修正されていますが、もともとの目標値が達成できないと想定される理由や原因等について分析することが期待されます。(D)
- ・目標の達成に向けた新たな行動計画の策定が望まれます。(E)
- ・リメディアルクラスの設置は全体の底上げのためには適当な取り組みですが、「600点以上のスコアを記録する学生の割合」を増やすことを考えれば、インテンシブクラス受講の促進などの取り組みを検討することも必要ではないでしょうか。(F)
- ・行動計画に沿って、1年次英語リメディアルクラスが設置された点は評価できます。(G)
- ・これまでの取り組みは「評価尺度の基準レベルが高すぎる」ため、今後の目標値が引き下げられています。理想と現実の狭間で難しいところがありますが、今後は目標達成に向けて精力的な取り組みを期待しています。(H)
- ・行動計画③について、リメディアルという表現は、教育課程において単位認定をされる科目に用いることは適切でないとされているため、注意が必要です。(I)

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

基礎学力に基づいて論理的に思考し、その内容を他者に伝える能力を備えてグローバルに活躍できる人材を育成する。

(狙い内容)

多くの学生は本学部卒業後は社会へと出て行くので、社会、とくにグローバル化が進む社会で役立つような学びを本学部で提供する。そこで、教務上の2つめの目標として、基礎学力を使って論理的に思考して他者に伝える能力を涵養するために、論理的に文章を書く能力を育てる横断的なカリキュラム(Writing across curriculum)を提供する。すなわち、授業の中で論理的に考えて文章を書くことを指導をする科目を既存科目の中から指定していき、担当教員相互のFDを通して、このような能力を育む教育を提供する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

学部を卒業していく学生が、目的(例えば、論証、提案etc.)に合わせて機能する文章を書く能力を身につけていること。

2. 達成度評価

評価指標	卒業要件となる科目群とは別に、「Writing across Curriculum 科目グループ」なるものを設定し、それに参加する科目を徐々に増やすことを目指す。それに参加する科目は、授業回数とほぼ同じ頻度で文章作成を行う科目(文章作成は、授業内・授業外を問わない)とする。	評価尺度	A : 80(ほとんどの演習科目といくつかの講義科目) B : 40 C : 20(多くの基礎演習) D : 0
-------------	---	-------------	---

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		C 基礎演習(1年次)のみ	C 基礎演習以外の科目を 検討開始(実績)	C	B	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	C	C	実績	B			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	基礎演習(1年次)のみ	基礎演習以外の科目を 検討開始(実績)		基礎演習とそれ以外 のいくつかの講 義科目			

【2017年度の進捗状況について】

基礎演習科目については学内のインゼミ大会におけるディベートや、レポートの作成指導を通じて、さらなる基礎学力の向上、コミュニケーション能力の向上の必要性を各担当者がさらに強く意識し、目標達成に努めている。また、基礎演習以外では、研究演習において、アクティブ・ラーニングの重要性を意識し、基礎学力の応用力の向上を目指した指導を行っている。それ以外の講義科目についてもレポートを提出させるなど、教育目標2の達成を目指しているところもある。ただ、既存の科目以外についてはまだ検討の段階である。(行動計画について)本年度は、昨年度(2016年度)に実施したFD勉強会の実践年度と位置付けているため、勉強会は実施していない。しかし、基礎学力に基づいて論理的に思考し、その内容を他者に伝える能力を備えてグローバルに活躍できる人材を育成する、という目標の充足度に関する報告を含む勉強会を翌年度に実施することも検討に値する。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- 2016年度には目標を達成するための「Writing across Curriculum に関するFD勉強会」を実施するなど具体的な行動を起こされたことなど評価されます。本年度については、実施年度と位置づけて、自己評価は見込みでBとされていますが、実施年度にふさわしい評価指標、尺度を設定されることが望まれます。(A)
- 本教育研究目標は非常に重要な取り組みであると感じています。そのため数値目標の達成が非常に難しいのですが、こうした挑戦的な目標に学部として取り組む姿勢は有意義であると思います。それゆえに、本教育研究目標を推進すべき行動計画の関連性が気になります。本目標の実質的な推進に向けて別の切り口で行動計画を考えられるのも一つの方策であるかもしれません。(B)
- Writing across Curriculumの取り組みは、順調に進展しています。(C)
- 2018年度以降の継続的な行動計画の策定が期待されます。(E)
- 進捗状況で「検討に値する」と結んでいますが、検討するのでしょうか。
- 実践年度では、次の年度にどんなFD勉強会を実施する必要があるのかについて、実践内容とその成果について検証することが望まれます。進捗状況の報告によれば「充足度に関する報告を含む勉強会の実施を検討(に値)する」とありますので、実施に期待します。(F)
- Writing across Curriculumへの参加科目の増加は評価できます。教育研究目標の達成度については、実際に文章を書く能力が身についたかどうかを評価することが望まれます。(G)
- 基礎演習を中心に運用が始まった「文章を書く能力」の養成について、今後は他の科目にも広がっていくことを期待しています。(H)
- おおむね順調に進捗しており、評価できます。(J)

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

すべての学生が活躍できる学部を目指す。

(狙い内容)

各学生が将来を見据えて学部4年間の目標を立て、その目標に向かって少しでも前進し、その前進がよく自覚できるよう、学生の個性に応じた支援をする。そのために、入試形態別に成績・課外活動・就職のデータを利用して、それぞれの特徴から改善点を探り、教育を中心に支援を提供する。また、そのために学習ポートフォリオを学生が活用する枠組みを構築する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

成績不振者・勉学意欲喪失者・退学者を現在よりも減少させ、かつすべての学生の大学生生活満足度を現在よりも上昇させる。また、各学生が将来の自分の夢を実現するために、適切に科目履修・資格取得ができるような仕組みを強化する。さらに、社会変化に柔軟に適應する力、いかなる職場においても貢献する力を育てるために、課外活動なども含めて学生の全人的成長を見守る。

2. 達成度評価

評価指標	退学者数、 留年者数、 学習ポートフォリオ利用率 学生生活満足度	評価尺度	A : 退学者27名、留年者134名、ポートフォリオ利用率90%、学生満足度90% B : 退学者30名、留年者139名、ポートフォリオ利用率60%、学生満足度88.5% C : 退学者33名、留年者144名、ポートフォリオ利用率15%、学生満足度87% D : 退学者36名、留年者149名、ポートフォリオ利用率15%未満、学生満足度85.4%
-------------	---	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D すべての項目でD評価	D すべての項目でD評価 (昨年度並)	C	C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	D	見込み	D			
	見込 実績・ 目標 (値又は 状況)	すべての項目でD評価	すべての項目でD評価 (昨年度並)		行動計画①:D評 価、行動計画②:C 評価			

【2017年度の進捗状況について】

2017年7月現在では2017年度の以下の数字が固まっていないため、暫定措置として2016年度分の数値を提出。退学者:43名、留年者:155名、ポートフォリオ利用率:2016年度時点では未導入(2017年度より運用開始)、学生満足度:84.7%ポートフォリオの利用促進については入学式でのガイダンス、副学部長によるアンケート調査の実施、一部教員によるポートフォリオを介しての提出されたレポートの学生への返却などを行なっている。なお、退学者と留年者の人数を評価尺度に取り入れているが、在籍学生数に左右されることがあることから、今後在籍者数における退学者、留年者の割合で測る指標に変更することを検討している。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 目標の抽象度が高すぎるように感じます。狙い内容などの記述からある程度推測はできますが、具体的な目標にすることが期待されます。(A)
- ・ 教育研究目標と行動計画の評価指標が同じですので修正が期待されます。進捗が遅れていること自体は問題がないわけではありませんが、挑戦的な目標設定を掲げている場合は結果として予想されることでもあります。むしろ、原因分析のうえで次年度の取り組みへ繋いでいくサイクルこそ重要であり、本教育研究目標の達成に向けての改善の取り組みがおおいに期待されます。(B)
- ・ 評価指標どおりの目標の進展が期待されます。(C)
- ・ 適切に自己評価が行われています。今後の進展が期待されます。(E)
- ・ 多様な学生が活躍できる学部にするための取り組みは評価できます。APIに掲げて受け入れた多様な学生が、社会で活躍できる力を身に付け、関学経済学部で学んだことに誇りを持てるような取り組みが今後も期待されます。(F)
- ・ 教育研究目標と行動計画の評価指標が同一ですが、行動計画では教育研究目標を達成するために何をするのかを立案し、その進捗を評価することが求められます。(G)
- ・ 退学者数、留年者数を減らす取組みが進められる中で、行動計画①にある「スポーツ選抜入学生や外国人留学生」へのアプローチがどの程度効果が出ているのかが気になります。(H)
- ・ 目標に向けて今後の進捗が期待されます。(I)

【A票:教育研究目標4】

(タイトル)

対外的な研究成果の発信に努め、教育へのフィードバックを含め、研究成果を社会に還元し寄与していく学部を目指す。

(狙い内容)

教員による研究活動を活性化し、社会へその成果を還元していくために、学術誌、ディスカッションペーパー、セミナー、コンファレンスなどにおける研究発信に加え、学部ホームページなどICTを利用した情報発信を充実させていく。特にグローバル化が進むなかで、英語での情報発信を増やしていく。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

学術誌、ディスカッションペーパー、セミナー、コンファレンスなどにおける研究発信をこれまで以上に積極的に進める。また、セミナー、コンファレンスなどの開催も積極的に行うことで研究交流を促進し、同時に研究成果の発信に努める。具体的には、掲載論文数の増加、掲載学術誌の水準の向上、セミナー、コンファレンスなどの開催の頻度の向上が挙げられる。

2. 達成度評価

評価指標	発信できる研究成果としてのディスカッションペーパー発行数と経済学セミナーの開催回数	評価尺度	A：行動計画①②どちらもA B：行動計画①②どちらもB C：行動計画①②どちらもC D：それ以外
-------------	---	-------------	---

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D 行動計画①②どちらもD	D 行動計画②のみCだが ①はD	C	C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	D	見込み	C			
	見込 実績・ 目標 (値又は 状況)	行動計画①②どちらもD	行動計画②のみCだが ①はD	見込み	行動計画①D評価 行動計画②B評価			

【2017年度の進捗状況について】

2017年度春学期終了時点でのディスカッションペーパーの本数は6本であり、前年度同時期に比べ増加傾向にあると言える。また経済学セミナーの開催回数についても8回と、前年度同時期の4回に比べ増えている。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ディスカッションペーパー数、セミナー開催数については増加傾向にあることは評価されます。増加させるための方策についても行動計画の中に盛り込まれることが期待されます。(A)
- ・行動計画1の評価尺度の変更が的確な結果分析につながることを期待します。(B)
- ・行動計画①の評価尺度を何故変更されるかの説明が望まれます。(C)
- ・適切に自己評価が行われています。(E)
- ・教育研究目標の実績が現状の評価尺度では適切に判断できていない。評価尺度の見直しが必要です。
- ・教育研究目標と行動計画の評価指標が同一ですが、行動計画では教育研究目標を達成するために何をするのかを立案し、その進捗を評価することが求められます。(G)
- ・研究発信(ディスカッションペーパーの発行数)について、現状に則したかたちで目標が引き下げられていますが、研究発信は経済学部/経済学研究科に限らず大学全体として大きな課題ですので、今後精力的な取組みに期待したいと思います。(H)
- ・目標に向けて今後の進捗が期待されます。(I)

【A票:教育研究目標5】

(タイトル)

データに基づき、各種の高大接続方法を検討・改善する。

(狙い内容)

本学部の教育でその能力を伸ばせるような学生が入学できるように、入試形態別のデータに基づいて入試や他の高大接続制度を改善していく。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

多様な学生を受け入れる一方で、各自がディプロマ・ポリシーを満たして卒業できるよう、入学時点で必要最低限の学力のある学生が入学できる高大接続制度にする。

2. 達成度評価

評価指標	学年別に、入試形態別平均GPAの学部平均GPAからの差を指標とする。	評価尺度	A : 4学年とも安定的に-0.45以上 B : 2学年が安定的に-0.45以上 C : A・B以外 D :
-------------	------------------------------------	-------------	---

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		C ふたつの入試区分によ り-0.45以下のものあり (実績)	C ひとつの入試区分によ り-0.45以下のものあり(実 績)	C	C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	C	C	見込み	C			
	見込 実績・ 目標 (値又は 状況)	ふたつの入試区分によ り-0.45以下のものあり (実績)	ひとつの入試区分によ り-0.45以下のものあり(実 績)		五つの入試区分によ り-0.45以下のもの もあり(2016年度 秋時点)			

【2017年度の進捗状況について】

大きな進捗はないが、2016年度に実施したスポーツ選抜入試の評定平均値の見直し(3.0⇒3.3)の結果を見てその影響を判断することが必要である。また帰国生徒の平均GPAが2016年秋の時点で2年生に大きな悪化が見られていることを受けて、その検証が必要である。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・適切な目標が設定されています。一方で行動計画が「見直しに着手」と抽象的に記述されています。(A)
- ・新しい行動計画と目標の修正を期待します。(B)
- ・適切に自己評価が行われています。(E)
- ・行動計画に沿って、入学後成績データに基づく入試形態の制度の変更が行われた点は評価できます。(G)
- ・スポーツ選抜入試の評定平均の見直しの影響や、帰国生徒のGPA悪化の要因等の分析を行い、今後の施策に繋げていくことを期待しています。(H)
- ・目標に向けて今後の進捗が期待されます。(I)